

ねじりはちまき

 謹 賀 新 年

輝かしい新春を迎え、皆様におかれましては益々ご健勝のこととお慶び申し上げます。旧年中は格別なご高配を賜り厚く御礼申し上げます。本年も皆様のお役に立てるよう一層の努力をもってご厚情にお応えしてまいりますので、変わらぬご指導を賜りますよう宜しくお願い申し上げます。本年も皆様のご健勝、ご多幸でありますよう、心からお祈り申し上げます。

今年は、午年ですので飛躍、前進の年になることを願って、実り多き一年になりますように。

寒さ厳しき折、くれぐれもお体ご自愛ください。

有限会社 幸田建設

新年あけましておめでとうございます。本年も宜しくお願い致します。皆様にとって良い年でありますように。昨年はわたくしの父、常一が、黄泉の客となりました。母親の何回かの入退院。長年お世話になった方の天国への旅立ち。命には限りがあるんだなあと思わせられる年でした。私自身も、70歳になり他人事ではなく感じるのです。これまでは、命に終わりがある事に気をとめませんでした。終わりがあるという事は、時間にも制限があるのだと、やっと気づくのです。今までの過去の事、これから先の未来の事を思う気持ちが全くなかったとは言いませんが、深刻に考えることがなかったのです。頭の中が平和だったのです。今年からは、70歳に1つずつ、歳が増えていきます。増えるということは、終わりが近づくということですね。時間がないということですね。そう思ったら『生きた証を残す』という想いが芽生えたのです。『さ

て、どうしましょう。』 やっとスタート地点に立てたという新鮮な気持ちの新年を迎えました。なんでもっと早く 20 歳 30 歳の時に気づけば良かったのにと
いう、反省も含めてこれまた新鮮でした。新しい境地に立って残っている時間
をどう過ごして、何をやるべきかを決めて迎えた新年は、もちろんこれからく
るであろう新たな年も有意義に生きようと思います。70 歳の男としては幼稚極
まりないのですが、どうか見守って下さいますようお願い申し上げます。

代表取締役 幸田一二

謹んで新春のお慶びを申し上げます

旧年中は格別のご厚情を賜り、厚く御礼申し上げます。本年もより一層ご満足
いただけるよう努めてまいりますので、どうぞ宜しくお願いいたします。

社員一同

<会社近況>

ただいま、郡山市の店舗改修工事をお世話になっております。

本宮市では住宅改修工事をお世話になっております。

令和 8 年 1 月 5 日発行

<発行責任者>幸田久美

有限会社 幸田建設

969-1204 本宮市糠沢字八幡 1-1

電話 0243-44-3816

<後記>明けましておめでとうご

ざいます。本年も宜しくお願い

いたします。2026 年が皆様にとって

輝かしい一年でありますように。

(ほしの)

自然農法について

今回は自然農法について取り上げたいと思う。考えてみれば、家庭菜園というか、自給用というか、遑れば畑作はこんなものだったろうなと思う。我が家の家庭菜園も自然農法に近い方かもしれないが、そこまで徹底してはいない。そもそも農業とは自然と最も近い、自然と共にある営みである。

しかし、市場に出荷するとなると、営農規模もそれなりに大きくなるし、求められる品質・規格にも適合しなくてはならず、自然農法によるわけにはいかなくなる。だが、自然との関わりという点では、無視できない代物であると思う。そういった意味で、やるかどうかは別として、どんな代物か覗き込んでみたいと思う

1.自然農法とは

自然農法は1947年に福岡正信氏（故人）が提唱された。福岡氏は「無から有を生めるのは自然のみで、農家は自然の営みを手伝うだけ」と考え、「不耕起」「無肥料」「無農薬」「無除草」を原則とする自然農法を始めたのである

現在では、自然農法といっても有機農法である「農薬・化学肥料の不使用」を原則とし、「不耕起・無除草」はしないといった傾向にあるともいわれる。

2.自然農法の実践者の紹介

福岡正信氏が提唱された自然農法に共鳴し、それを実践し、自然菜園を多くの人に伝えたいとスクールを開催している人がいる。竹内孝功氏である。インターネットでも紹介されている。竹内氏は、自然農法の入り口として、「自然菜園」という誰にもできる形にして、現在長野校、安曇野校、東京町田校では現場で、それとオンラインで自然菜園スクールを開催している。竹内氏は19歳の時福岡氏の著書「わら一本の革命」に出会い、学生時代から東京都日野市の市民農園で、試行錯誤しながら自然農法を実践してきたという。以下は竹内氏の自然菜園の実践を氏の話のを要約して、充分とはいかないが紹介したいと思う。

3.竹内氏の自然菜園の実践

- (1) 自然菜園では、里山のような環境を目指している。放任でもなく過度な管理でもない、野菜と生き物が共生できるバランスのとれた菜園づくりを心がけている。その中で重要な役割を担うのが「草」の存在である。草は野菜と共に土中に無数の根を張り巡らせ、スポンジ状の団粒構造の土を作るので水はけがよく、かつ保水性も高い、野菜の生育に理想的な土壌環境になる。

（注）団粒構造の土：排水性・保水性の他、保肥力（養分保持）もある。

(2) そのため、草は根から抜かず、地上部分のみを刈り取る。それを「草マルチ」として野菜の周りに敷くことで、保湿・保温の効果が得られ、新たな草が生えにくくなるので、野菜が草に負けることがなくなる。敷いた草にはミミズやヤスデが集まり、分解する過程で土壌をさらに団粒構造にしてくれ微生物の多様化により病原菌の繁殖も抑えられる。

その上、草を抜かずにそのままにしておくことで、野菜の害虫が寄ってきても、草に棲む昆虫やトカゲなどの天敵の狩場になってくれる。自然菜園は、多様な生物が生息することで豊かな生態系が形成され、害虫に負けない野菜が育つ環境になるのである。この点に注目しておいてもらいたい。

(3) また、野菜の特性を生かしてお互いに助け合う環境をつくるコンパニオンプランツや、相性のよい野菜を季節ごとに交互に植えることで、土壌が改善されるリレープランも活用する。 (注) 例：ジャガイモと根深ネギ

実は、せっかく畑の生態系が豊かになっても、耕してしまうと9割の土壌生物が死んでしまい、草の根が形成した根穴構造や、土壌生物がつくった団粒構造も壊れてしまうのである。京都大学研究によると、生物がつくった土の構造の復元には2年かかると言われる。そのため「耕さない」ことが重要になるのである。いったん畝を立てたら壊さず、修復しながら使い続けるようにする。そのため、最初はできるだけ整った畝をつくることを勧めたい。

(4) 実践する過程で、種の重要性を実感し、毎年育てた野菜の種を採取するようにしている。そうすることにより、その風土に合う作物が育っていくことになる。種には、野菜の一生と自然の情報が詰まっているといえる。

今回は以上で終わります。いかがだったでしょうか。「耕さない」というのは驚きでした。その理由も分かりました。でもやれるかな。